

P27

幼若永久歯・歯頸部寄りの歯根破折例の経過は？

○林 秀¹⁾ 伊東泰蔵²⁾

ふるげん歯科クリニック¹⁾ (医)いとう歯科医院²⁾

【目的】

外傷歯の中で、歯頸部寄りの歯根破折は予後的にも困難とされている¹⁾。

今回は2症例を紹介し、歯髄処置を行った例と有髄で通常の固定後に観察した例との比較を行ったので報告する。

【方法】

症例1 患者：13歳 男子 主訴：歯が折れた
現病歴：野球練習中に接触して、相手の頭部で打撲した。次の日に受診。

口腔内所見：上右1番・破折部位の歯頸部付近は、歯肉が増殖していて、その縁下に露髄した歯根部を認めた。X線所見：口腔内所見とも2か所の歯根破折を認めた。左側は歯冠破折で露髄寸前であった。

症例2：患者：12歳男子 主訴：歯の動揺
現病歴：野球試合中にボールがバンドして上顎前歯部を打撲。その日に当院を受診し、治療を開始した。

【結果】

症例1は、増殖した歯肉を切除したが、増殖を繰り返し起こるも補綴を装着した。左側は、覆髄して充填していたが、その後根尖病変が発現して歯内療法を行った。

症例2は、外傷後固定を3週間行い、2か月経過をみた後歯髄診断器では無反応だったので、無麻酔で露髄した時点で“痛み”を訴えたのでビタペックスを塗布した。歯の変色はなく、1年後の経過では歯髄反応を認めた。

【考察】

- 1) 歯頸部寄りの歯根破折は難症に近い。
- 2) 症例1のように、破折片を除去せずに、先ず破折片の接着を行って固定を検討。
- 3) 症例2は歯髄感染に注意して、歯の変色や歯根部のセメント質の画像にも精査が必要である。

【文献】

- 1) 日本外傷歯学会. 歯の外傷治療ガイドライン.

P28

当院における小児がん患者の周術期口腔機能管理の実態から見た今後の課題

○長田侑子, 釜崎陽子, 西口美由季*, 日高聖*, 近藤好夫*, 西俣はるか*, 佐藤恭子*, 福本志保, 藤原 卓*

(長大病・小児歯, *長崎院・医歯薬・小児歯)

【目的】 当院はがん診療連携拠点病院であり、小児歯科では小児科入院加療中の患児に対して周術期口腔機能管理を行っている。小児領域においては、多職種連携による質の高いチーム医療の提供が、子供たちのQOLの向上に重要な役割を果たすとされている。今回の調査は当科の周術期口腔機能管理の現状把握と、今後の課題抽出を目的とした。

【対象と方法】 2017年1月から2019年6月までに、小児がん治療中に周術期口腔機能管理を行った患児53名を対象とし、初診時年齢・性別・Hellmanの歯齢・齶蝕の有無・かかりつけ歯科の有無・原疾患・原疾患治療に伴う有害事象の有無を調査した。

【結果】 初診時年齢は0歳1か月～18歳0か月。IC期が多く(26.4%), 要治療歯は13名(24.5%)に認められ、29名(54.7%)がかかりつけ歯科を持たなかった。原疾患は造血器腫瘍が41.5%, 固形腫瘍が30.2%で、有害事象としては口腔粘膜炎が4名、智歯周囲炎が1名に生じていた。

【考察】 今回の調査で、かかりつけ歯科を持たない者は乳歯列完成前の児に多くみられた。彼らは口腔機能発達のきわめて初期の段階で口腔管理上困難な状況におかれるため、専門的な口腔管理サポートは有効である。また、低年齢で化学療法が行われる場合、形成中の乳歯および永久歯への晩期障害が懸念される。小児がんの治療率は80%以上に達しており、原疾患の治療を終えた患児が成長発育後に地域の歯科医院へ受診する機会は今後益々増加すると考えられ、晩期障害について周知していく必要がある。周術期口腔機能管理として、治療期間中の有害事象に対する予防および対応は最重要だが、それだけでなく保護者や患児と十分な信頼関係を構築し、管理後の晩期障害を見据えた継続的な長期フォローアップも重要で今後着目すべき課題であると考えられた。